

え人なんか素晴らしい人氣ぢやねえか……妹が歸つて來あがつた時ア、まあ好つた、是れでサバ／＼したと思つてると、妹はメソ／＼泣きあがつてね、兄さんお前は何てえ物の解らねえ事をするのだらう、夫りや政黨と政黨の争ひだから、民政黨に附くも國權黨につくも銘々の好勝手だが、稻積さんてえ方は些とも後暗い事のない方であるし、妾の亭主勝田てえ方も立派な紳士で民政黨中でも指折の豪い人だ、お前さんなんか幾干脅迫しても、自分の斯うと思つた眞直ぐの道は決して曲る方でない、お前さんの様に猿橋なんてえ人に頼まれたからつて、おツちよこちよいな彌次馬に駈け出し、妨害運動をして好氣持で居なさるが氣の毒だ、妾は覺悟して歸つて來たが、何うか此後、は些とは物を考へて遣つておくれとね、夫れは／＼染々と言あがつた、其の時は何のくだらねえ噓言と鼻の先で、ンと言てゐたが、彼様ことに成つて見ると妹の言た事が耳の底に残つて氣が引けて仕様がねえんで茫然して居る

のでげす……それに親分も聞て居なさらうが、民政黨の方が威勢が好く、運動だからつて公明正大とやらで、厭味がねえぢやねえか、同じ運動に肩を入れるなら己ら稻積さんに一肩入れて、切て死だ妹の志しを繼ぎ草葉の蔭から喜ばして遣りてえと思つて居やすよ。」

と仙藏は妹梅子の自殺を悲しみ、鬼の目にもホロリと一滴の涙を注いだ、腕を組で熱心に聽てゐた達磨の長次、

「仙、お前のいふ處は大きに道理だ、お梅坊があゝ云ふ事に成つて見ると、犬死もさせたく無からう……乃公だつて一旦頼まれたから、お前にまで迷惑をかけ、一人しかない妹までを殺させて決して好心持はしねえ、幾干何だつて遣口が面白くねえからなア、踏みこんで何處までも遣つ附る氣にも成れねえだ……曲つた事は大嫌へな乃公だが、乃公は一旦あゝして頼まれ、諾も云つたからは、善くも悪くも最う仕方がねえ、今更變がへつて駈けすり廻



れもしねえが、お前は直きく頼まれたのぢやねえし、妹の一件もあるから遠慮せずと遣んな、お梅坊がいくら喜ぶか知れねえ、夫れも佛への功德だ、腥坊主のお經を上げるより確に喜ぶよ……うむ、遣んな、好から遣んなよ乃公はお前への義理だ、最う手を引いて何様ことがあつても面出しもしねえ妹に犬死をさせねえやうに遣れ。」

と情もあり涙もある親分の義心に、仙藏は雀躍して喜び、

「親分、ぢやア己らが、一肩入れてもお前さんに苦情はねえかい……」

「何の苦情なんか云ふものか……若しか彼の都合からイザコザが持上つても、達磨の長次が屹度引受けた、ウンと引受けた安心して十分にやれ！」

「親分、有難うごせえます。」

と仙藏はますます喜び勇んだ。

「仙や、彼の手合もお前の裏切りと聞けア、黙つても居めえ、何様煽りを喰

ふか知れねえから、覺悟して遣んねえ、晒はれるやうな事はして呉るなよ。」  
 「宜うがすとも……なアにお前さん、人間は壘の上に居ても死ばる時にやア死ばるものでさア。」  
 「ふむ、其の氣でやれ！」

### 三六

仲裁・持込み——勝田の懐  
 舊——相互の會——當選安全

期日は最う三日の後に迫つた。敵も味方も運動は猛烈になつて、僥倖を得やうとする候補者は必死である、中には大勢の歸着したので諦め、自ら運動を中止したのもあつた。

流石に岸山照雄は名聲もあり徳望もあるので、其の有権者も意志が鞏固で移り氣はない、反對黨が如何に藻掻きに藻掻きて切崩しに掛つても大磐石であるが、稻積武夫の方は落選の憂ひは更に無いけれど、投票を承諾した者の中には



盤玉の一團があつて、三四十票の動きが危険である。で、此の運動員は是れが防禦に多大の注意を拂つて、岸山派の腕利浦住良平の如きは應援に赴いて活躍を始めた程であつた。

稻積の事務所には勝田清隆も出張して、油断なく反對黨の潜り込みを監視して居ると、浦住良平がノソリと遣つて来て、勝田の卓子の横に椅子を擔ぎ込み

「勝田君、今日は不思議な仲裁を依頼されて、柄にない口を利かうと思ふのだがね、忙しからうが聴てくれたまへ、實は稻積君にも相談したが、君さへ承知してくれ、ば異存がないと言つとるでねえ。」

「何だい、君、仲裁なんつて……」

「それが妙な譯で、僕に岸山君から命じられたのぢやがね……」

「岸山さんが君に仲裁を委託されるとは、いよゝ解らん事件だね、全體何だい問題といふのは、少しも見當が付かないので、五里霧中にあるやうな話

だねえ。」

「その問題は……君が主義の爲めに離別された奥様の兄川口仙藏が、壯烈な貞操を守られた奥様の意志に感憤し、先非を悔悟して謝罪の申込みを岸山君に斡旋してくれと、青物市場の有權者で彼れの同業者より依頼して來たのだ。」

「はア、川口仙藏が悔悟したと云ふのか、彼れ等は案外性質が淡泊で、自分が悪いと氣が注くと改めるに吝ならんものだが、夫りやア憎むほどの者でないし、動機が動機だから承知もしやうけれど……」

「實はね、あの土地は岸山君に三分の二は投票する事に確定しとるが、一分は例の達磨の長次が抑へてゐるので反對黨の有に歸しとるです、然るにだ、君の奥様が壯烈なる御最期に彼れ川口仙藏は強い感動を引き、鬱悶して居ると反對黨の運動がますます、陋劣で而も老獪なる上、竦腕男の陰險手段が見え



て来たので、悔悟の念は深く君へ謝罪して、稻積君の爲めに反對黨の投票をお土産に運動したいといふ希望であるのだ。」

「何うして岸山君へそんな仲裁を持ただのだらう。」

「是れにも譯がある、彼奴の悔悟には達磨の長次も同情して、奥様の御最期を徒死せしめない考へから、彼等一派の有権者へ協議すると、何れも奥様の意氣に感じ、仙藏に同情の意を表した結果が……岸山君の有権者の一人で大鳥喜兵衛といふ俠氣ある男、此の市場が二つに割れて民政黨と國權黨の双方に肩を入れては、互に睨み合せて面白くないと思つて居る時であつて、全體が假令選舉する人は異つても、同じ黨員の名士に投票する上は、市場の平和とも成るから、岸山君の仲裁を依頼し、君へ謝罪して稻積君に味方させやうと盡力したので、岸山君も歡んで承諾し我が輩が加勢に来たるを幸ひ交渉せよと言れたのぢや、君、何うかね岸山君に面して彼れの望みを容れて遣つて

呉れたまへ、我が輩からも御依頼する、左すれば彼れも満足であらうし、既に逝かれた奥様も喜ばれるであらうと思ふが……」

勝田清隆も飽もせず飽れもしない妻の梅子であつた、其の最期を稻積武夫より聞たときに、扱てはと胸中萬斛の涙を以て吊ふた程である。今また妻の死に依て頑固で向ふ見ずの男が非を覺り、其の悔悟に同情者があつて味方に馳せ加はらんとするのである、勝田とて感慨と懷舊の情に耐へ難いものはあらうが、そこは男である、

「宜しい解つた、私に於いては何等の異存もない、彼れも亡妻の兄として遇し、従來の如く交際しやう。」

と快諾したので、浦住も大いに喜び、

「やア、有難う……彼奴も大いに喜ぶであらう、忙しい處だが事務所下さい、一寸と面會して遣つてくれ、連れて来るぞ。」



「承知した……」

と云ふに、浦住は俥を飛ばして出た、暫くすると川口仙藏を伴ふて来た。彼れは常に變つて紋附の羽織に仙臺平の袴で、踏躑の態度で恐る／＼椅子に着く、此の時稻積武夫も幸ひ馬車を駈つて事務所へ来たので、浦住に口を添へ、勝田へ仙藏より詫言を済した。

こんな事で青物市場の投票三分の一は稻積の手に落ち、いよいよ其の當選は確實なものとなつた。

### 三七

油断は大敵——團員も逃げ  
腰——參謀の献策——壯丁募集

油断は大敵である、國權黨の名士吉田善右衛門は、渡邊録太郎を參謀として活動を始めたが、兩黨の軋轢は日々に甚だしい上に、人氣が兎角民政黨に傾いてゐる。従來の競争には手を束ねて投票を握ると同じことで、政治界の波瀾に

餘り關係しない實業團を土臺として立ち、身は政黨に籍は置けども、左ほどの深入もせずに居たので、平和に高點を得來つたが、今度は現政府の大臣とも關係が深い、従つて黨との間も密接になり補領と數へられて居るから、世にいふ出る抗は打たれる譬へで、是れまで無意味で團員として推舉した實業團の人々も、國權黨の補領たる吉田善右衛門ではと首を捻るもある、又輿論に反對する黨員の推舉は快くない、然りとて公認候補として立ち、古い關係のあるものを俄に排斥するも氣の毒と、棄權と覺悟するものも多くあつて、形勢非なる傾きの見えたので、急に騒ぎ出した、參謀の渡邊録太郎の如きは、殆ど晝夜の差別なく活動を續け、我が家へ歸つて枕を高く安眠することは、茲二週間前よりない迄に荒まはつて、山犬のやうに何處でも構はず僅の寸隙さへあれば、運動員を督勵しつゝ突進したので、漸う幾分回復の曙光を認められた、それも多くは黄金の光輝を後楯に、猛烈な突貫である進撃である。殊に國權黨政府で總ての



運動には便利もあり、反對黨に高壓的手段を施すにも都合好きものから、多勢の運動員に使喚して盛んに跳ね廻つた結果が、築地三丁目の有権者三好與志郎の立間で衝突し、端なくも棚倉派の運動員と争闘を開いたも、應援者の駆付けに穢なくも退去し、直ぐ襲撃を加へんとしたけれども、流石に政府も私に警察権を濫用し、自黨の騒々しき襲撃を餘所に觀過したとあつては、次の臨時議會に肉薄の材料となり、政府攻撃の火の手がいよいよ強大となつては、折角解散までを決行して鼎の輕重を試んとするに、又もや劈頭第一に不信任案騒ぎを惹起せば、今度こそは秋月内閣は瓦解して、政權は敵の手に落ちねはならぬと申し譯の喰止めに是非なく嘲笑冷罵を忍んで控へた、またも此の衝突が吉田派の不信を招く動機となつて、折角回復しかつた人氣は朝日に逢ふた春の雪ほど、ベタ／＼と腰を折て京橋に於ける活動の骨折損となる、これに反して鎬を削つた棚倉派は、運動費に欠乏して將に寂滅すべしと豫想したのに、又も光

明を放つて目覺しき武者振である、且つ自働車で一女流の活動は、割烹店なり待合なんどの奥へ乗り込み、胸倉とつての膝詰談判に大分の有権者を攫はれ、當選如何すら氣遣はるゝ始末になつた。渡邊鏗太郎はます／＼躍起となつて、寧ろ自棄氣味の大奮闘だ。

「吉田さん、最う尋常では到底も勝利は請合切れんよ、長田伯に協定して一大干渉を施行させる一法あるのみだ、公爵だつて蠻勇を振ふて、議會を解散するくらゐだからね、此の二三日間長田伯に大々的の便利を與へて貰ふ談判をしやう……我が黨の名士たる君が落選するやうでは心細いで、之れが山間の一地方なら又と我慢も出来るが、政府が眼張てる東京ぢやないか……君がこんな悪戦苦闘するのなもの、我が黨の候補者として東京で立つものは思ひ遣られるぢやないか……東京から國權黨の代議士が一人も出ないと成つては、現政府の輕重も豫定されるよ、輿論／＼と反對黨の叫ぶ聲がいよいよ



よ輿論と認められる譯ぢや、君何とか長田伯を動かさうぢやないか……」  
 「長田も随分巧妙に遣つておるがね、逆潮に棹さすのだから意の如くならんのだ、何うで臨時議會では攻撃の矢表に立つ覺悟はあらうから檢束だね、反對黨の運動員で有力な奴を檢束させるのだね。」

「それも名案だらうが、最う二三十名の運動員……いや、運動員と云ふより妨害員を募集してドシ／＼放たうぢやないか……なアに、小揚の人足でも日傭取でも、車夫でも何でも構はんさ、只だ腕ッ節の強い奴に限るよ。」  
 と協議は定つた。吉田善右衛門は馬車を丸の内へと馳せた。

吉田派の運動員は俄に屈強の壯丁が殖ゑて新に又一戸を借りて第二の事務所を開くほどである。京橋方面に向つて復讐戦を再開する意志であつたが、最初の切込みに撃退されたのが障つて、棚倉派の警戒は嚴重になつてゐる。放心チヨツカイを出したら此方の不利となるのみだ、渡邊鏡太郎も歎息したが中々に

手を引かない、今度は久保田環に候補讓與の談判を再び強面しくも持込んで来た。けれども見事刎ね飛ばされて了つたが、容易に萎まない高壓手段を弄してもと、一方には秋月公爵に迫り、鷲塚男爵に評議を持ちかけ、長田伯爵には反對側の檢束を申込むさまは、恰も狂者の如くで殆ど常識も脱けたかと思ふやうの事もあつた。

### 三八

自動車の先着——主は誰れぞ——  
 女將の巧辯——美人の壯語

鷲塚男爵は最う期日が明日と迫つて、國權黨の袖領たる吉田善右衛門が危地にあるとの報告頻煩であるので、心も心ならずして自動車を走せ、築地の大待合新喜久岡の表まで来ると、自分より先に既に一臺の自動車が来てゐるに目を注げ、ハテ誰れが来てゐるのであらう、吉田と會合の約束はあるが、彼れは馬車の筈である、それに時間が一時間ほど早いから吉田では無論ない、乃公の來







「選舉權ツて何ですか……此節皆さんが煩いと申し上げては済みませんが種々の事を言て入らつしやるには困りますよ、何貴下、棄權するのが何處様へも差支へがなくて宜うございますわ。」

と當らず障らずに巧くつるりと遁るに、流石の男爵も少しく凹みの體であつた

「お内儀さん、お客様がお歸りになりますッて」

と女中が廊下で云つた。女將は驚塚に會釋して席を立つた。驚塚は尙ほ女客の誰れであるかを確めやうと、便所と稱して態々表の階子段を下りる、此方からは丁度歸るところでバツタリ顔が逢つた、驚塚男は異様な眼附で睨むやうに一瞥する、女の方は一向平氣の體でこの顔を見ると軽く會釋して、

「驚塚の御前御愉快ですか……お楽しみですねえ。」

「いや、お僊さんぢやね、貴女は何うして此様處へ……」

「此處へは能く参りますよ、お友達の家ですもの、妾が來て悪いてえ譯はな

いちやありませんか、ねえ女將さん……」

と翻弄することく云つて再び、

「驚塚の御前、妾もね、些と考へることがございまして、秋月の御前よりお暇を戴く積りだもんですから、此節は我儘の仕度放題をして居るのですよ、

秋月の御前にお會遊ばしたら、彼んな女は爲めにならんから暇を遣れと御前よりも御言葉添をして下さいな……眞個ですよ、眞個にお暇を戴く了簡になつたのですわ。」

と意味あり氣に平氣で喋舌り立られたに、男爵も烟に巻かれた氣味で、苦笑ひをして居たが、お僊の不敵なる不貞腐の言葉に深く考へたらしく、

「は、ア、お前は公爵から暇を取つて、何になる積りだ、また新橋へでも出て縮緬鍔を賣物にする氣か……」

「口の悪いことねえ、妾だつてねまさか藝妓はしやアしませんよ、チャンと



濟した奥様にでも成りませうかねえ。」

「ふゝむ……自働車で選舉運動に飛び廻つてお前だからね。」

と判然言つたので狼狽するかと思ひの外、お僊は微笑んで、

「お察し通りですわ、其の先を聞くのは野暮よ……ほゝほゝ。」

と笑ふとき玄關へ馬車が着た。男爵は倉皇使所の方へ往つた、お僊は少しも騒がず、

「女將さん、是非ね、あの方をお頼み申しますよ。」

### 三九

選舉の當日——休憩所の異彩——  
井關派の暴力——壯快な萬歳

今日は五月五日である、決戦當日である。家々には甲人形を飾り吹流しの鯉は空に翻へつて壯快である。

選舉される人の大勢は既に定まつて、最う運動の餘地はないが、各區役所の

前には鏡を削つて争鬭した候補者が推薦者休憩所を設け、運動員が眼を皿のやうに見張つて詰め、自派を推薦する有権者を他へ奪ひ去られぬ用心をして居る。

一有権者の投票に来るごとに、何れの休憩所にも監視の眼鏡く、自派のものと見るや款待を極めて休憩所へ請じ、追従輕薄至らざるなく其の狀のそらく

しいには、心あるものは厭な感じを起すもある程である。有権者の中でも痺を切らして出後れてゐるものがあると、馬車を差立て義理詰めに迎へんとするも

ある。俵を持せやつて勧誘するもあるので、運動員は目のまはる程忙しく、有権者に向つて萬歳を浴びせて歓迎して居る。

朝のうちは未だ何れの休憩所も稍や静であつたが、十時ごろからは狩り出しに忙殺される、接待に混雑を極めて芋を洗ふやうになつた。何處の區にても岸山照雄の如き稻積武夫の如きは休憩所も繁昌してゐるが、割合に靜蕭で運動員も比較的落付いて、絶えず十數輛の俵は來てゐる始末、神田區役所の眞正面



には岸山の休憩所がある、此處は根據地であるから一層目立て、隆々各候補を凌駕して超然一等を抜く形勢を示し、彼の増毛繁治などは入口に出で、有権者の往來に注目監視を怠らず、浦住良平、蟹江祐次の徒は意氣揚々として接待に暇なした、是れに并びたるは稻積武夫の休憩所である、素より根據地でないから岸山派ほどの威勢はないが、勝田清隆も午前のうちは來てゐた、例の川口仙藏は羽織袴に威儀を繕つて接待員中に入る、雑用に働くものは何れも仙藏の手から來た壯丁、この邊で人に名も知られ顔も賣つた連中だから、他の休憩所とは異彩を發つて居る。これと相對する向側には反對黨の猛將として頻りに辣腕を揮つた井關謙道といふが睨んでゐた。井關は土木請負師を後援に頼んで、暴力を以て有権者を困しめ、威力を以て無理強に投票の承諾を求めて歩いたと評判のあつた候補者である。朝から俾を馳せて有権者の送迎を事とし、休憩所はなか／＼に見た目は優勢を示して居たが、岸山派の有権者が來ても稻積派のも

のが俾を飛して來ても、運動員は總出で往來に跳り出して要撃せんとする、一度でも運動員が襲つて曖昧に斷り切らなかつた者と見ると、自派の休憩所へ辣し去り、否も應もなしに投票せしめんと腕を扼するので、何時衝突の起らうも知れぬ形勢が仄見えた。

十數臺の俾は轍を并べて勢ひよく乗り込んで來た。井關派の休憩所からワツと喊聲が揚がると、

『そら來た！ 市場の連中だ、裏切連中だ……用心せい……』

と先なる一人が怒鳴ると、バラ／＼バラ／＼十五六人休憩所から馳せ出して、俾の前に立ち塞がった壯漢、

「諸君、君達は一旦我が井關君に承諾を與られたのだから、是非井關君の休憩所へ寄つてくれ、我れ等が先導護衛して君達に指も指せるものぢやないか

ら……」



と一同を奪ひ去らんとする光景は、素よりの喧嘩腰である。此の體を見ては稻積派の休憩所からもソレ反對黨の妨害だと云ふと、眞先に飛んで出たは川口仙藏である。

『いけねえ、妨害しちやアいけねえ、お前さん方の選舉人ぢやねえよ……』

と大手を廣げて井關派の車諸共に自派へ着けんとする眞中央へ割り込む、

『お、仙兄哥、居て呉れたか……』

と車上の人々は聲をかける。仙兄哥の聲を聞くと、曳て来た車夫の態度は急に壯快になつて、楫棒を掴んで自個の休憩所へ辣し去らんとする壯漢の手を拂ひ退け、

『いけねえや、邪魔アしあがるな……』  
と一喝する、

『なに、邪魔……汝等の知ることぢやないわ、柔順に此方へ来い……』

『生意氣を云な、手前達の自由になつて堪るもんかい、糞でも喰へ……』

と勢ひ猛に跳ね退けて、稻積派の休憩所へ楫棒を下すもある、此の騒ぎに豫て用心の爲め手傳ひに来てゐる川口仙藏の仲間のものは、頼まれ、ば火の中でも水の中でも厭はぬ血氣の若者、勇みかゝつたる井關派も躊躇するうち、市場の連中は皆休憩所に入り、其の警護で無事に投票を入れ、再び俾に乗れば稻積派は一同に、

『萬歳……』

と叫んだ。車上の人も車夫も其の壯快なさまに知らず識らず、

『萬歳……萬歳……』



## 四〇

虚勢と静肅——狂犬の舉動——  
喧嘩の賣込——横合から一本

混戦に混戦を重ねた京橋芝の方面は、一層の闘闘が猛烈であつた。京橋に於ける吉田派の休憩所は二ヶ所にも設けられ、虚勢を張つて其の運動員は殆んど茲に全力を注いだかと思はれる程で、物凄いやうに見えた。これに拮抗して實力も伴ふたのは棚倉豊策の休憩所である、一旦の非境も盛返して雄姿堂々たる優勢を示し、何となく沈着な態度も現れてゐるやうで、陣營も一糸紊れず静り返つて有権者を優遇する状は、勝誇つて兜の緒を締めるの趣きがあつた。是れに次ぐは久保田環の休憩所で、模範的を標榜して立つだけに、總てが虚飾を避けて質素を旨として居るが、これも活氣は棚引いて、見るからに先づ當選は大丈夫らしく見えた。その他も皆それ相應に休憩所を設け、有権者の優待準備をしてゐる。

選挙人は俾に徒歩にそろりと出向て来た。各休憩所では自派の投票者を見逃すまいと、眼を八方に配つて油断なく見張て居る、悪戦苦闘を續けて今や天目山の争ひである、敵の有権者は妨害を加へてもと最後の決焼點まで、陋劣手段に依て萬一の勝を得んとするは吉田派である。一有権者が來るごとに喊聲をあげて迎へ、頭をビョコ／＼下げては引き入れんとする、其の状は見るも哀れに心情の見え透て汚ない。參謀の渡邊鏖太郎は陣頭に立つて多くの運動員の指揮に努め、棚倉派でも久保田派でも容赦なく、有権者と見ると誰れ彼れの見境もなしに、要撃して自派の休憩所へ連れこみ、投票を強んとして衝突を來たし朝から小糶合をしたこと三四回にも及んだ。

久保田派の有権者が徒歩でテクつて來るのを見るや、例の通り吉田派の運動員は渡邊の指揮の下に駈け出し、

「是れは何うも御足勞でした、先づ一服なさい……なに手前共が御案内い



たします、さア何うぞ……」  
 とお世辭たらしく、辣し去らんとする、有権者も面喰つて只だハイ／＼と挨拶するを、占めたと我が休憩所へ伴はんとしたが、看板に吉田善右衛門選舉諸君休憩所とあるに、吃驚して袖を拂ひ、久保田派の休憩所へ逃げこむと、運動員は追窮して、

「一旦、吉田派の休憩所に入りながら急に久保田派へ投ずるとは失敬ぢやないか、卑劣ぢやないか……久保田派は模範選舉を口にしながら吉田派の有権者を横取りして済ます不埒極まる、その人を渡さなければ腕力に訴へても連れて行くが宜いか……」

と脅迫して来る。久保田派では、素より我が派の有権者である、如何に模範を標榜してゐても斯うなつては黙つて居る譯にはいかぬ、

「此の方は、久保田環に投票して下さる意志だ、吉田派に投票される方な

い、君の方で無理に休憩所へ引張り込んどしたのぢやないか……夫れに逆襲して来るとは何事だ……腕力で来るなら来い、お對手にならん……」  
 と勿ねつけると、吉田派の壯丁は追々に久保田派へ押寄せて来る、是が非でも奮ひ去らん結構で、其の遣り口は殆ど常識に缺けた無謀である、人を見ると咬つく狂犬の舉動である、棚倉派の休憩所は久保田派と隣合てゐるので、選舉人の出入に妨害となるから、當日も岸山の方から遊軍として防備に来てゐる五味信太郎は、直接ではないが吉田派の妨害に甘んじて居られない、失敬な奴だと怒りの色を現はし、可し、乃公が追拂つて呉れうと、憤然身を起すや、表へツと出で、

「さア退け、妨害になる……」

と休憩所前に群がる吉田派の運動員を突き除けると、彼れは手懸りさへあれば咬て掛らんとする自棄半分である、



「なにが妨害だ、君の休憩所へ來てるのぢやない……餘計な口出しするな……」

「なんだと……」

と短慮な五味はますます怒つて再び強く突いた。吉田派の壯丁はよろ／＼として倒れる。是れを見た渡邊はムシヤクシヤ腹で自暴自棄に成つて居るときだ、

「暴力を揮ふなら、構はん……遣れ！」

と叫んで頻に罵詈の言葉を放つ、壯丁どもはワツと喚き狂つて、久保田派の方を捨て、棚倉派へ喰つて掛つて來た。この形勢である、吉田派の無謀を朝から拳を握つて憤慨して居た血氣の運動員は、前々よりの遺恨も含んで居るところである。忽ち衝突は猛烈になつて殴つ、撲る、叫ぶ、喚くの修羅場を演じて混亂を極めたが、棚倉派の勢ひはますます旺盛になる、吉田派の壯丁は多く一時備ひのものである上、久保田派とて自派の選舉人から事が起つたのである、對

岸の火と傍觀しても居られない、棚倉派と一團になつて當つた、斯うなつては抵抗力が到底も足りない、吉田派は一敗地に塗れて引き退ぐに、血氣の壯者は追跡せんとするを、久保田派の富沼庚治や斯かることに馴れた五味信太郎が極力制止して、哄然喊聲を揚げ物別れになつて鎮靜に歸した。

#### 四一

民政の勝利——内閣の改造  
俊子の煩悶——氷邸の空屋

騒ぎに騒いだ總選舉は濟んだ。當選したものは得々として居るが、落選者は河童に何とやらで茫然と悄氣かへつて、殆ど精氣のない脱殻の軀に息の通つて居るのみである。

岸山照雄は流石に最高點で出た、稻積武夫も其の次位に出た、皆川お僊が富貴も榮華も犠牲に供して運動費を貢いだ棚倉豊策も成績よく、意氣揚々として其の名聲を博することが出來た、模範選舉を標榜として始めから正々堂々を本



領とした久保田環も、世の同情に投じて月桂冠を採つたが、國權黨の袖領として實業團を踏まへ大丈夫と安心した吉田善右衛門は、餘りに輿論を見縊り過ぎた結果、間際になつて死物狂ひに活動したが、それがまた人氣に逆らつて、國憲黨の本部でも秋月公爵でも鷺塚男爵でも力瘤を入れて、應援をしたが意外にも落選の憂き目に逢ひ、餘り人も注目しなかつた同黨の小泉進午が出るなど番狂せもある、總じて再選が多い新顔は民政黨の棚倉豊策と國憲黨の小泉進午であつた。議員總数が三百七十一名中、矢張民政黨が百八十餘名、國憲黨が百二十餘名、中立俱樂部が三十餘名、その他は無所屬の代議士が全國から當選されたのである。

總選舉の形勢が斯様次第であるから、秋月内閣の命脈は何うあらうか、現在の儘では臨時議會で瓦解しなければならぬ運命となつた。けれども鷺塚男の如き長田伯のごとき策士がある、政權を反對の民政黨に渡すは如何にも残念であ

る、假令や茲一年でも二年でも何う漸縫策を講じてても、持續しなければならんと肝膽を碎き、聯立内閣に改造しても、目的を達せんと老獺手段に出で、貴族院側より二名ほど閣員の椅子を授け、改造を名として輿論の鋭鋒を避けやうと早くも内談は整ふと、鷺塚男は第一に辭職して國憲黨の指揮に當つた。こんなことで輿論の鋭鋒は幾分避けた。内閣の一角を改造してお茶を濁すなどは最も卑拙な遣り方ではあるが、また機敏な點もないではない。

内閣がこんな始末である、鷺塚男の野に下つたとは云ふものゝ、秋月内閣の現存する以上は閣員と何等の相違はないのだ。總選舉は意の如く反對黨を攪亂することが出来なかつたのである。彼の虚榮に走る女丈夫英俊子を手懐け、岸山照雄の唯一の運動員なり參謀である増毛繁治を巧く中傷したと思つたも、只だ一時で忽ち彼れの信用は舊に復した。谷河久忠を陥れやうとして巧くいかなかつた。秋月と鷺塚は英俊子の口車に乗つて多くの運動費を占められたに過



ぎない結果である。

英俊子のお覺えは餘り目出度ない、時に驚塚男の邸を尋ねて面會を求めても多くは不在だの御用多忙だので追拂はれる、秋月公爵の方は、素よりである。只だに夫ればかりでない、今では政友から犬と罵られて面に唾きされんばかりである。殆ど孤立の姿になつては如何に大膽でも心細くなる、女は女同士と云ふことがある、氷川の皆川さんを訪ね、公爵に何とか取持して貰ひ、一身の方向を定めねばならぬと俊子は氷川の邸に来て見ると、門は固く閉ざされて皆川といふ軒燈も取拂はれてある、是れは變だなど潜り門を押と僅に開いたので、スタク／＼奥へ入らうとすると、

「若し、何處へお出でになります。」

と門の内を掃除してゐた爺やに咎められたので、俊子は立ち止まつて

「あの、皆川さんにお目に懸りに……」

と云ふを爺やは變な顔をしてジロ／＼と俊子の姿を守つてゐたが、

「皆川さんつて、此のお邸にゐたお妾さんのことですかい。」

と云つた。其の舉動が如何にも尋常でないから俊子も、軒燈の取拂はれる事など思ひ合して、急に不思議な感じが起こり、

「はア、其の皆川さんです……何うかなさいましたんですか……」

「は、ア、彼のお妾さんかい……彼れは最う此のお邸には居ません……お前さんのお心易い方か知らねえが、意外もない女で、御前からお暇が出まして、今ちや何處に居るか居處も知りませんよ。」

「え、皆川さんはお暇になりました……何か悪いことでも爲つて……」

「なアにねお前さん、此の邸が自分の名前に成つてゐるを宜いことに、大層もない借金をしあがつてね、自分から飛び出して行き居りましたよ。」

「へえい……」



と流石の俊子も驚いた。夫れにつけても差當り宿らんとする小蔭に雨の漏るやうな氣がして、皆川さんが最う居ないとすると、取附く島がない、あゝ困つたものだ。と悄悄と、氷川なるお僊の舊邸を出る、頭の上を近く飛び行く鳥が啼いたのも、自分を嘲り笑ふ氣がして思はず仰向いた。

## 四二

代議士の新宅——奥様の評判——  
金の使ひ徳——奥様に御面會

青山三丁目を曲つて四五軒、生垣を結びまはした一構へがある。立派な紳士の邸宅ではないが、辨當官吏の住居でもない、門構へになつて氣の利いた家で標札には棚倉寓と出て居る。まだ越して來て間もないが、時には馬車が門前に待つこともある。主人が在宅であると傳の二三臺は何時も來て居る。中々交際も廣いやうだと近所では云つてゐたが、今度の總選舉で當選した若手の代議士だ、民政黨中で鏘々の名士だと知れると、誰れも敬意を拂つて主人の出懸ける

を見るときは、敬禮をするやうに成つた。

家族は奥様と呼ぶ、二十七八の美人と女中二人に車夫、網曳の若い衆は毎日外から通つて來てゐる。奥様は直な人で、時々小女を連れて近所へ買物にも出る、近所の人にも腰が低くて中々評判が好い、何處となく意氣な容子のあるは、素人ではあるまいとまで餘計な穿鑿立てをして、他人の疝氣を頭痛に疚むものもあつた。

家にとては落付て居たことのない主人、今日は書齋に籠つて取調べものをして居る。

「ねえ、貴郎、例の一件で先方から掛合が來ましたが、名義が妾のもので、現に一旦くれると云つて登記までさせて置いたのですから、彼れさへ渡してしまへば何のイサコザは無からうと思ひますがねえ。」

「あの抵當一件か……大丈夫だ、突刃ねれば宜いが、一萬圓に満ない金で



渡して了ふのも惜いやうな氣はするが、お前が思ひ切つて遣つて了ふ氣なら……」

「そりや惜くはあるが、いくら何でも氷川の彼の邸に住ふことも出来まいし妾の名になつてたとて、元々自分の物とは思はなかつた家地面ですわ、思ひ切つて清潔さつぱりと遣つて了ひませうよ、考へて見れば彼れだけのお金が使ひ徳でしたわ。」

「諦めた方がよからうねえ。」

「貴郎は何處までも知らない顔をして居なくてば……好ですか。」

「そんな處へ出シヤ張り度はないから、巧く埒を明けて了ふが好いさ。」

「今思ひ出しても、彼の時は妾夢中だつたわ、貴郎の落選は大丈夫だ、吉田派が金力で壓倒したからつと、得意になつて二階で話して居るを聴く身の辛さ、え、最う破れかぶれた何うなるものか、若し遣損なつたら二人で朝鮮

へでも高飛するまでだと、斯う臍を固めると氣も大膽になつて、自働車で飛び歩く氣になつたのよ。」

「私だつて、お前から運動費をくれない前は、到底も駄目だ、落選と覺悟を極め、一層暴力で吉田派と争はんと決心して居たのだ……處へ運動費が切迫詰つた手許へ天降つたので、ます／＼奮闘する氣になつて運動員の勇氣も百倍し、見事敵を驅逐し負せたら愉快で堪らん。」

「妾もね、彼の明日から事務所が活氣附いたのを見て、勇氣が出て一生懸命運動しましたよ、投票の前日築地の新喜久岡に乗込み、お内儀さんを到頭説き伏せ間違ひのない約束をしてゐると、鷲塚が來たぢやないか、此家で逢つては拙いなと思つたが、貴郎の形勢は最う大丈夫と見たから、構ふことはない、此方から傳法に出てやらうと決心してね、随分思ひ切つた熱を吹き掛けて遣つたのさ、流石の鷲塚も狼狽したわ。」



「いや、お前の腕は全く凄いや、何うしても二三枚方役者が上だ……」  
 「また、其様おひやかしかしを云つて……費用は幾干掛つてますか……」  
 「何しろ、騒ぎを遣つたので詳細には解らんが……今までに調たところは、約一萬二千圓だらうね……例の八千圓ね、慰勞の祝宴を開くだけ稍と残つたくらゐだ。」  
 「左様、妾が自働車で四五日駆歩いたのでも千七百圓が何程も残らなかつたわ。」

と話てる處へ小女が一枚の名刺を差出し、

「奥様この方が、お目に懸り度と云てゐらつしやいましたか……」

「誰れ……」

と名刺を手に取つて見ると、坂本安藏とあるので、眉を顰めながら、

「噂をすれば影だ……坂本が來ましたよ、今お話して居たやうに判然と言

て了ひませうね、宜うございませう……」

「坂本つて何だい……」

「あの一件の周旋人でさア……安どのことですわ。」

「あゝ、左様か……ありやア坂本といふのか、宜しい噂を明けた方が氣掛りが無くなつて結局面倒でなからう。」

「それぢやア、八疊のお座敷へ通して置いておくれ、應接所だと旦那様の方にお客のあつた時に困るからね。」

「はい、畏りました。」

### 四三

臨時議會——書留郵便  
——誠心誠意の懺悔書

臨時議會は六月一日より開會になつた。豫算は前年度のものを習套する事であるから、日數は僅々十日間だ、議長は矢張り政黨の手に落ち前の議長春海資



基である、副議長の椅子は國憲黨が必死となつて争ふたが、中立倶楽部の總理大野木信高、全院委員長が岸山照雄と決し、其の他にもそれ／＼に定まつて、不信任案が民政黨から出るとの風説もあつたが、今次は出す平穩無事で議會は終りを告げた。不信任案の提出を見合せてには少壯議員中に大分硬論があつたが中立倶楽部の旗幟が分明でない、無所屬側にも曖昧の態度が見える、大政黨たる民政黨より提出した不信任案が空しく討死するは、黨畧に於いて面白からぬ點がある、縦や申譯ではあるが内閣の一角を改造して民意を迎へたは、確に一部降参である。次の議會まで反省の時を與へおき、尙ほ輿論に反抗すれば其の時こそ、一撃の下に倒すも可なりとの老實な議論多數を制し、現内閣はホツと一息ついたのである。

議會は閉されたが、政海の餘波は尙ほ荒れて動搖して居るけれども、民間の狂熱は一般に覺めて、人々の頭腦は漸く冷靜になると、此度は暑氣が襲ふて來

て熱い／＼と唸くやうになつた。

岸山照雄は毎年七月の末から八月一坏は、沼津の別荘に暑を避けるのが例となつてゐる。今年の暑さは殊に甚だしいやうだから、まだ少し早いがそろ／＼出懸ける積りで準備に掛つてゐた。本部へもその事を報じおいて明日は出發せんとして居る時、書留郵便で一封の親展書が來た。差出人の名前は聞き馴れない、無論知人ではあるまいと思ふたが、親展書と寄越からは何等かの用事に違ひない、兎角こんな手紙などには一身上に就て、糊口の道を求めんとする蟲の好者が多い、また大方そんな輩の依頼狀だらうと思つたので、直ぐに封を切らうとしなかつたが、折角寄越たものを見ずに置くも本意であるまいと、氣を取り直して披くと、劈頭に懺悔書とある。はて懺悔書、是れは糊口の道を求めるばかりの依頼狀でも無いらしいと、岸山は考へて讀下すと、

妾は妾の愚昧に呆れ、この書を先生の机下に呈するも最と耻しく、厚皮しき



譯なれども、神も懺悔するものは其の罪を許さるとかや、誠心誠意の改悟を表して、懺悔するときは神も許さるのである、妾は誠心誠意の改悟をいたし、神に誓つての懺悔を先生の前に捧げ、妾が心得違ひから惹いて先生に御迷惑をかけた罪を謝せなければならぬ。

妾は夢を見る如き意外な幸福を受け、位置名望ともに天下に誇るに足る、幸運を一身に集めんとしつゝ、あつたにも拘らず、愚なる淺慮から幸福は變じて禍災となり、世間からは爪弾きされて顧る人もなく、親しくした友も妾の虚榮にかられて、踏み迷ふた行道を憎み言葉を交しくるゝもの無く、左なきだに木から落ちた猿に均しき妾、今は右を向くも左を向くも、頼るものもなく殆ど渺々たる洋中に漂泊するに均しく、救ひの船を求めんにも聲は喧れ、手足は疲れて擧げもならず、進退谷つて漸く我非を覺り、あゝ誤つたと千々に身を責め悔ても返らぬことになつた。

斯うなつては最早、妾より妾の心の改悟を知るものなく、人に語るも人は信せず、只だ煩悶懊惱に苦しみ月日を送るのである、誰れを咎むることもない妾は妾の幸福を妾の手に於いて打捨つたのである、妾は妾の心の迷ひから先生にも御迷惑を掛けたのである、父や兄の名を汚して哺育の恩を無にしたのである、今更その位牌に向つても流汗淋漓、手も痺れ眼も眩むやうになつて、爲すところを知らぬ程の苦痛に、精神は朦朧として狂ひ昏絶したこともある、心に燃ゆる火は焔々として消える時なく、苛責の鬼は暴威を揮つて身體綿の如く、寧ろ死してこの苦限を逃れんと幾度か、樹下に立ち川邊に佇立んだこともあつたが、煩惱の幻は眼前にちらつき、昨日まで妾の手に握つた幸福の夢、覺めんとして覺めがたく、茲に妾は妾の罪を只管に懺悔して、先生のお許しを得たいのである。

先生よ、先生よ、妾はいま誠心誠意を籠めて、神に誓ひ懺悔の書を御手許に



送つた、何卒眞人間に返つた痛の心情に、又現在の境遇に一掬の涙を減きたまひ、今日迄の罪を許すとの一言を與へられん事を神かけ祈上候。

月 日

悪魔の手より逃げた

英 俊 子

岸山照雄先生机下

とあつた。此の文面では全く改悟したやうである、彼れも使ひやうでは使へる奴であつたに、一朝の過誤から一身の置處なく煩悶するか、憐れむべき境涯となつたものと、未練なく其の書を引裂いて火鉢に投じ、燐寸で火をつけることバツと燃あがつて、灰がヒラ／＼と高く舞ひ上かつた。

四四

意外の邂逅——立話の  
懺悔——女同士の同情

類焼當時はまだ悲觀が左ほど激しくなかつた、直ぐ新に家を借りることも出

來、小遣に困ることもない、只だ氣掛りは岸山照雄の冷遇であつた、社會の同情が薄くなつたが、其の身の既に葬られて居るには氣が注かなかつた。政海の波瀾に游泳して居さへすれば、何時も天下は泰平である、秋月公爵や鷺塚男爵の手から金は搾られるやうに思つてゐたが、波穩かに海上小波の打つ程の日和となつては、捨られて顧みるものがないに悲觀して來た。氷川に皆川お僊を尋ねて行方が知れず、思ひ餘つて岸山照雄に懺悔書を送り、幾分か期待する自惚の心に將來を想像したり、幸福なるべき虚榮の夢に耽つたりして、僅に煩悶を慰めてゐたけれど、岸山からは何の消息もない。して見ると懺悔も許されないのであらう、許されないとすれば最早この社會に身を置く餘地がないのだ、生ながら葬られて何を樂みに苦痛を忍ばん、あゝ死あるのみとは思ふが、猶ほ殘るは未練である、若し罪を許すとの一語を聞く暁天、罪を許し懺悔を認められたらば、或ひは再び幸福なる生涯が頭上に宿らぬとも限らぬ、今死を急ぐは短



慮である。勝手に理屈をつけ、懊惱に精神を疲らして青山墓地に埋葬する父の墓前に涙を流し、電車に乗るも乗客に顔見らるゝが何となく、犬よ〜と罵らるやうな気がして懶きまゝ、ぶら〜青山の通りへ出て歩き出した俊子は、自分突當りさうに擦れ違ふた小女が、

「奥様〜……………」

とけたましく呼ぶに、不圖返返つて見ると何うやら似てゐる、自分が尋ねて行き力と頼まうとした皆川お僊に似てゐる。奥様と小女の呼ぶ處から察すると又も旦那取をして居るのか、何でも構はぬ心に寂しさを感ずるとき、誰れでも話相手に成つてくれる者があれば、其の人が懐しく思へる、あの人は随分浮世の波に漂泊つて酸も甘いも汲み分があらう真心をもて話をしたら力に成つてもくれるだらう、今の身で聲を掛るも耻しいやうな氣はするが、此處で見掛たが僥倖とならうも知れぬと、勇氣を出し思ひ切つて頼んで見やうと、走り寄るや

「皆川さんぢやありませんか……………」

と云つた。お僊は小女をつれて買物に出て、乾物屋の前に放心立てゐる處を、唐突に呼ばれて吃驚すると傍に立つてゐるのは俊子であつた。而も憂愁の氣が其の身體に纏ふて、物思はし氣の態度があり〜と見え透いてゐる。

「おやまア、英さんですか。」

とチロ〜見られた。此方は氣の咎める僻みか知らんが何となく輕蔑むやうにも思はれたけれど、俊子は冷かな態とらしい笑みに紛らし、

「皆川さん、何處に在つしやいます、實はいろ〜お話申したい事があつて氷川のお邸をお尋ねしましたが最う在つしやらないので落膽して居た處でしたよ。」

「左様、妾もね、疾うにあそこを出て、今ぢやア此の三丁目に居りますが……………何か妾に御用が……………」



「はア、妾も飛んでもない心得違ひから、今までのお友達には捨られて了ひ最う誰れ一人話對手に成つて下さる方もなくなつてねえ……」

「おやく、夫れぢやア彼の一件からですか……お氣の毒なまア……」  
 「それでね、貴女にお絶り申してお智恵を拜借しやうと存じ、お住居を何れだけ尋ねて居たか知れませんでした。」

「左様ですか……妾も今ぢやア身を固めましたので、彼の時分のやうに呑氣でもなく、何事も妾の一存では出来ませんよ。」

と俊子の凭れ掛るを避けんとしたが、お僊は元來の俠氣である、弱いものと見ると見捨て願みない譯にいかない、俊子が今話對手に成つてくれる者が一人もない、寂しい境涯に陥り、自分を力に頼まんと尋ねて居たと聞くと氣の毒になつて來た。公爵のそこへ來て運動費を掴み出し、棚倉豊策まで落選させやうと計畫んだは面憎いが、目前その悄悄として精氣のない舉動を見ると、好氣味と

捨て置かれたいはお僊の氣性である。

「今ではあなたは何處に居なさるの……」

「市ヶ谷加賀町の知邊に厄介になつて居りますが、妾はつくづく自分の愚なのに惡憎が盡きました。」

「人はそんなにくよくよするものでないわ……今日は何處へ……」

「父の墓參をしてお墓の前で十分に懺悔をして罪を詫言て來たところです。」

と云ふ其の容子が浮た調子でない、確に境遇から改悛の情が出て、邪道に踏迷つたを悔てゐるやうに見えた、お僊は捨て去ることが辛いかのやうに思はれ、  
 「英さん、往來で立話も變だよ、まア妾の家へ入らつしやい、良人はあなたを知てゐなさるもの、今不在だが、兎も角入らつしやいよ。」



## 四五

洋服の泥——吃滿するお客——  
 一倍人が悪い——話對手に成る

お僂は後子を伴ひ歸り、其の改心の體に同情を表し、良人が歸つたら相談しやうと思つて待つて居たが、今宵は何うしてか遅い、最う十時も過ぎた、女中は座睡を始めコクリ／＼と船を漕ぎ出した。

「何をして居るのだらう、今夜の遅いことは……歸るには極つてゐるが……」

と獨言をいつてゐる機會、お歸りと云ふ聲がして俥は玄關へ曳き込れた。女中は吃驚して飛び出した、お僂も玄關に迎へた。棚倉は奥へ來て洋服を脱ぐと膝が泥塗れになつてゐるので、お僂は揉みながら、

「貴郎何うしたの……此様に膝を泥だらけにして……」

「まだ泥がついとつたか……吉田の奴め、落選をまだ根に持てるのか、濱

町の宴會歸りに態と乃公の俥に衝突して喧嘩を吹きかけたが、幸ひに浦住や五味も居たんで組打の騒ぎよ、乃公も久し振で鐵拳のボカ／＼を試みたが、何だか腕が痛むやうだ……」

「厭だねえ……眞個に……最う壯士なんかの眞似はお廢なさいよ、怪我でもしたら詰らないぢやありませんか……」

「乃公だつて其様眞似は仕度は無いが、敵に仕懸られて逃出しもされなからうぢやないか……」

「それは左様ですが、お廢なさいよ危険い……」

とお僂は洋服を衣紋竹にかけて壁際へ吊し、女中には締をしてお休みと命じおき、火鉢の側に腰をすゑて煙草を喫み始めた。

「貴郎、今日は珍しい人が來ましたよ、吃驚なざる人が……」

「誰れだ……不在に何様人が來たとて驚くことはないぢやないか。」



「英さんが……」

「なに、英が……彼の犬が……」

「それ御覧なさい、吃驚したでせう、ほ、ほ、ほ。彼の方も聞いて見ると可哀さうですわ、最う全く改心して居なさるのよ。」

「彼奴が改心しやうとしまいが、乃公の關する事ぢやないが……何で彼奴を寄附けるのだ、上げはせまいね。」

「上げましたよ、夕方まで話して往きましたわ……上げてもいいのよ、彼の方は貴郎を困めやうとしたから妾は敵にしてみました、今ぢや實に氣の毒な身上、全く改心して今日も阿父様のお墓へお詫に參詣しなすつたのよ、彼の時は魔がさしてお友達や知己を賣る氣になんすつたのだらう、自分で云ひなさるには、お嫁入の支度を立派にする爲めお金を造らうとえ氣になつたのが誤りだと夫れはく、泌々懺悔して居ましたよ。」

「全く改心しをつたかな……社會の制裁に感動したと見える……なに、彼様奴は素より眼中にないから何うでも好き……増毛の處へも怖い長い詫手紙に三百圓の證文を巻き込んで寄越たとか言て居たが、今頃氣が注いって遅時ぢやないか……」

「さう掻き蹴爲て了つたら夫れまでいすがね、罪を憎んで人を憎まずとやら云ふこともあるぢやありませんか、根からの悪人でなく、改心して懺悔したら憎むことはありますまいにねえ。」

「憎むほどの價值もないから、齒牙に掛けるものも無からうよ。」

「可哀さうにねえ……考へて見ると英さんより妾の方が餘程罪が深いやうですわ……その妾の送つたお金で當選しなした貴郎は最う一倍人が悪いのねえ。」

「は、ア、左様出られると一言もない、公爵に取つては飼犬に手を咬れると



いふ譬はあるが、手どころの騒ぎぢやない、豪い手傷を負せられて居るのだからねえ。」

「それ御覽よ、此方の上手を棚へ上げておいて、英さんばかりを責めるは可哀さうだわ……家へ遊びに寄せる位のことア構はないぢや無いか。」

「お前が寄せる分にはやア乃公は知らん顔をしようが、公然と出入させると云つては、政友にも氣兼ねなけりア成らんで……」

「無理に引張り込む心算はないが、來れば話相手に成つて遣るも功德だわ、誰れ一人對手になつて呉れないでは、何様に心細いか知れやアしないもの……」

「自業自得さ。」

「お前さんのやうに云て了へば身も蓋もないよ、妾が面倒見て遣らう、お互だ、また此方が何様世話になるか知れないのだから、好でせう。」

「それはお心任せ……大分遅くなつた、お、最う一時だ。」

「お休なさい、お床は展べてあつてよ。」

#### 四六

排斥の極度——悲觀の決死  
——沼津行——汽車中の依頼

社會からは排斥され人からは捨られて、單身孤獨となつた英俊子も、捨る神あれば助ける神ありとかで、皆川お僊が只だ一人同情して、憂きを語る對手になつてくれるが唯一の力である。けれども身の振方にも困る今日此頃の境涯、岸山照雄に送つた懺悔の手紙、見たか見ないか其の後の消息は杳として、人傳手にも聞くことが出来ない、あゝ我が身は何たる不幸の絡りであるよ、懺悔をして疚しい心は我れと我が身體から取去つても、世間の人はまだ改心を認めてくれない、知己朋友に逢ふて此方から聲を掛けんとしても、先方は顔を横に向け行過ぎて了ふ。あゝ厭になつた、厭になつた、浮世は苦の世界、思ふやうに



はならぬが浮世の常であるけれど、斯うまでも追ひ込められては尙ほ生存らへるは愚である、自分は何處まで莫迦であるか、何故に思ひ切つて死なれないのであらう、此様に耻辱を受けながら生を貪らんとする氣が、我れながらに呆れた意志の薄弱であるよ、是れだから畢竟あんな過誤も仕出來したのである、政友の人々に迷惑を掛けたのである、父や兄の位牌にも顔向けの出來ない事になつたのだ、と、愚痴のたらく述べて、悲觀に悲觀を重ねると死神が手を伸して、握手しやうと指頭のあたりまで來てゐる、左様だ最う是れまでだ、寧ろこの苦限を逃れやうと最後の決心はした。

あゝ是れで可し、何で最う少し早くこの決心が斷行されなかつたらうか、愚だ莫迦であつた、我が身に纏る總ての妖雲は拂ふに難い、最早岸山夫人となつて時めく望みは絶對にない、如何に懺悔したとて如何に改悛したとて、總ての醜名は容易に消すことが出來ないからは、企望を遂げる曙光もないのである。

今死ぬ、死ぬことは厭はぬ、覺悟は決して居るが、只だ此の上の最後に望みは岸山先生に一目あつて、假令如何なる面責を受けるとも、如何なる辛い悲しい憂きを見るときも、赤誠を籠めた懺悔をその面前で、我が口から思ふ儘に吐き思ふ儘に泣けば、夫れにて堪能も出來るのである、死して何の心残りもないのである。左様だ岸山先生は沼津の別荘に避暑をされて居る、東京にてお目に懸らうとすると人目の關が煩い、沼津なら却てお目に懸るに便利が宜からうと思ふ妾も沼津へ往かう、同じ死ぬなら先生の現在居らるゝ沼津で死なうと、最う死といふ一念にのみ俊子の心は傾いた。

心が極ると最う現世に用がない身體、手廻り〆道具も要らぬ、着てゐる物さへあれは着物も要らない、皆賣拂つて旅費の用意をした上、誰れ一人振向きもせぬ中で、お僊のみが同情を表してくれるから、暇乞の積りで尋ねて一時間ほど話、何氣なく別れて表へ出ると後髪を引かれるやうであつたが、新橋停車場



へ来たは午後の三時である、下の關行の急行が出る處である、是れに乗れば七時過には沼津へ着かれるが、素より手薄の旅費である、急行料を支拂ふより急ぐ旅行でもない、沼津行の三時五十五分に乘らうと、待合室の方へ歩を進める

「英さん……………」

と呼んだものがある、誰れであらう、此頃は此方から聲を掛けやうとしても人は避けるにと、立ち止まつて見ると鷺塚男爵である。

「これは……………何處へいらつしやいまする。」  
と會釋をする

「一寸、大坂まで行くが……………貴女は……………」

「沼津に用がございまして……………」

「左様、沼津……………此の列車で……………」

と考へてゐたが何か急に頷いてゐる、俊子は笑ひながら、

「この次で参ります、貧乏人ですから急行料の儉約をする積りで……………」

「は、ア、御一緒に行きませう、些とお話仕度こともあるから、汽車は私が騎るよ、お差支へなくば御同行しやう。」

と云つた。俊子は幾干でも旅費を助けて置き度ときである、先方へ乗込んで幾日滞在することに成るか知れないのだ、丁度都合だと喜び、

「それは有難うございます、では沼津までお供いたしませう。」

と云ふうちに、書生に命じて白切符を買せた。三時も最う十分すぎた、發車は三時二十五分發である、俊子は鷺塚男の後について一等室に乗込んだ。その室には客はない、鷺塚と其のお供の書生と俊子の三人であつた。瀛車は出て横濱を發車したとき鷺塚は手帳の片紙を切り取り鉛筆で走り書いて俊子に渡した。

「途中だから多くはないが……………少し位なら運動費を差上げやうか……………」



「なに、お跡の事にしませうよ。」  
と俊子は軽く云つた。七時十三分に沼津に着きて下車するとき、鷺塚男はまた

も  
「頼んだよ、巧く遣つて下さい……………」  
と云つた、俊子は只だ會釋するのみで停車場を出ると、日はまだ暮れ切らない  
が電燈の光りは輝いてゐる。

四七

徹夜の悶々——スタクに引裂  
く——思ひ出した深切な老爺

俊子は二度ばかり沼津へ来たことがある、何時も岸山照雄の別荘に泊つたの  
である。今度は別荘へ俵を横付にさせて乗り込むことは出来ない、別荘の近所  
にも旅宿はあるが態と少し離れた小松館といふ家に泊つた。

何うにかして面會をしようと思つて沼津までは来たが、乗り込んで往つても

逢つて呉れるか何うか問題だ、恐らく門前拂ひを喰されるであらう。左様な  
つたら警戒をされて猶ほ更に面會する機會が無くなる道理である、と云つて旅  
宿に放心泊つて居たら、費用ばかり嵩み目的を何時遂げられるか解らん、何と  
か工夫は無いものかと思案に餘つて、其の夜は枕に就いたけれど中々睡られる  
ものでない、一睡もせず夏に短夜ながらカラッと明けた、此の日は尙ほ一日  
滞在してと心を定め、旅宿で疑はれては詰らぬと、用もなき驛の中を歩き別荘  
の前を幾度通つたか知れないが、中は寂寥して出て来る人もない、濱邊の方へ  
行けば二階より見下す、岸山先生の姿が切ても見られやうかと、小松の繁る中  
を潜つてうろくしたが、二階は涼しさうに開放してあるけれど、先生の姿は  
更に見えない、家の者の影さへ認められなかつた。何の氣なしに袂へ手を入れ  
ると指頭に觸るものがある、摘み出して見ると、鷺塚男が書いて寄越した手帳の  
端片である。あゝ左様だつた、何だか探つて呉れとか云つてゐたが、此方の氣



をも知らないで吞氣らしい事を言つたものだ、沼津へ早く〜と思ふ一心で何が書てあつたか、碌々見もしなかつたが、全體何を探れと云つたのだらう、お土産にでもなる重大事件なら、お目に懸る手蔓にならうも知れぬがと、急に讀で見える氣になつて紙片を擴げ、皺々になつてゐるを展して眼を放つと、

沼津は岸山君の別荘があつて、現に岸山君は避暑に來てゐる、幸ひのことだから舉動を探つて知らせてくれ、政友の出入は成るべく詳細に、信書は自宅宛にして……一夜泊で歸京する豫定だ。

と書いてあつた。え、何處まで人を莫迦にして居るのだらう、妾に岸山先生を監視させやうとするのだ、此方から用があつて相談に往く時は、不在だ、御用多忙だと面會さへ拒絶して置いて、自分の都合の好ときは何だ汽車賃ぐらゐ出して先生を咒はんとするとは蟲が好すぎる、此様物は持つてゐるも今の英俊子改悛懺悔した此の身では汚穢はしい、えいと云つて其の紙片をズタ〜に引裂

き捨て了ふた。あゝ何うしたらお目に懸れやうか知らんと、煩悶しつゝ悄悄と宿へ歸つて種々考へたが、去年あの別荘へ先生の政友方と共に來た時、庭掃除に來る爺やがゐた、確に増毛さんだつた、其の爺やに妾を紹介し、今度この方がお出になる時は先生の奥様だから、粗魚があつては成らんぞと擲掄れた、あの爺や先生の阿父様の頃からゐた正直者で、先生が此の別荘をお求めになつたも、爺やの周旋だと聞いてゐる、左様だあの爺やに頼んで、先生にコツソリ手引して貰はうと、俊子は手蔓を得たやうな氣がして、早速旅宿の女中に聞合せて貰ふと直ぐ知れた。俊子は喜んで使ひを出し爺やを招待した。

『東京のお客様が、私のやうな者に御用があるとお使ひで……はい〜。』と質朴な老爺は遣つて來た。俊子は

『何うか此方へ……爺や……妾ですよ、お前覺えてお在でか……』と笑つた。老爺はヂット顔を見てゐたが、膝をボンと叩いて、急にビタ〜お



辭儀をして、

「違ひない、濟みましねい事をしました、御免なされませい……はい、年を取ると物覚えが悪くなつて、お見反申して濟みましねい、ははは、と莫迦笑ひをした。其の様子如何にも無邪氣で天真爛漫なのに、俊子は、いよく頼しい氣がした、

「爺や、妾はお前さんに折入て頼み度事があるのだが聞いて貰やうかねえ。」

「そりや、何なりともちやが……貴女は何だつて御別荘へは往きなさらんで、此様旅宿に居なさるんだね……私にはそれが合點いかんだよ。」

「御尤のことだ……それに就てのお頼みですが、今何も箇も包すお話すると、能く解るからね、何うか一骨折て下さい。」

「まア話で見さツしやれい、私で出来る事なら遠慮さつしやいますな。」  
と至極朴訥のうちに深切の氣は見てゐる、俊子も全く改悛して居るのだから

包す自分の懺悔をして、沼津を死所と定めて來たは、一度岸山先生にお目に懸りお詫をしやう爲めちや、決して奥様に成らうと云ふのでないと、言ひ終つてホロリと一雫たれた。首を垂れて聞いて居た老爺は、

「お前さん、私にその言を取次せいと云ひなさるのかね。」

「出来ることなら、爺やの骨折で先生に逢して下さいな……妾は懺悔を先生の前ですれば、それで最う何にも思ひ置くことはないのだから……」

「死ぬなんてえことは悪い……先生様が何と言つしやるやら、私には解らんが、お前さまの改心なさらつしやつた事を申し上げて見ませう、決して短氣な事をしては成りませねえ。」

四八

面會は拒絶——海岸の別荘——  
濱邊の逍遙——巖上の投身

唯一の頼みにした爺やの返事は、徒勞に屬して面會の手筈は切れた。自分が



沼津まで跡を慕ふて来て居ることだけが、岸山照雄の腦裏に刻みこまれたであらう、それが何の反響もなく、只だ面會拒絶の一語を聞くばかりに來たやうなものである、俊子は覺悟の上ではあるが、泣んとするにも泣けぬ苦痛、それまでに冷かな頭腦であらうとは思はなかつた、英俊子といふ者は疾くにその記憶から取り去られて居たことを覺つた。あゝ遅かつた、今更の愚痴、最う仕方がない、沼津へ來た決心を實行する迄と迫つた。生前の面會適はぬとならば強て求めまい、求めた處で男の意地、一旦成らぬと拒絶した舌で、再び許すとも云へまい、下司下郎の者なら知らぬこと、天下の名士と呼ばれ、未來の大臣と稱さるゝ先生である。適はぬ、適はぬと諦めて最期を肩よく仕様、それも何時何處で懺悔した脱売を終つたか知れないのも心細い、面會は拒絶されたが最期の一筆までを拒絶はされなかつた。爺やから手紙も無用とは聞かなかつた。然らばである、是れを最期とする決心は固まつて、小松館の印ある封筒を貰ひ、

最期の絶筆を巻きこみ、夕六時四十五分の上り列車で歸京と宿の手前を繕つて出た、旅は旅であるが現世を遠く離れ逝かんとする悲しき旅である。岸山照雄は沼津の別荘に暑を避け、政海の波濤も知らず顔に毎日／＼伸び伸びと保養してゐる。其の別荘は大きくは無いが、松原を前面に控へて海岸につき、雲煙模糊の間に三保の松原を瞳眸に收め、一方は巍然として雄大な富士山を望み、海に漁りする船の彼方此方に點々見え、眺望よき處である。最う田舎のお盆も過ぎた八月の半すぎ、晝間の暑さは砂も礫も焼け爛れるやうで、涼風颯々軒を掠める座敷にゐても、暑い／＼と何事も手につかず、安樂椅子に身を托して讀書に漸く日中を消しゐるも、夜になれば涼しき濱風に磯打つ波の音、身中の汗を洗ひ去るやうに思はれて心地よく、月明き宵など浪の打ち寄る磯傳ひ、漁り火を遠く眺めて霧に包まるゝ遠近の景、水彩畫のそれにも似るやうにボウとするさま、身も一面の畫幅に引き入れられた氣がして心地よい。岸山



照雄も夜に入ると浴衣にて月に浮れ出ることもあつた。

満月にはまだ二三日あらうが、月は中天に掛つて波の音に涼風を起し、漫歩きには好き宵である。最う九時に近い今ごろ海邊を散歩する人は最うない、寂々として打寄する波も凄いやうに聞え、寥々として微かに響く船唄は人を釣込むやうである。人のぬぬ寂しきこの景色雄大なる渺々たる海洋を見て樂しき斯かる時、岸山は裏庭傳ひ、庭下駄突掛つ、馴れた道とて小松の繁る松原を右に縫ひ左に曲り、うねりくねりて海岸に出れば、優しき波のチヨロ／＼と足下まで這ひ寄るも常のことながら興深く、岩に寄せ来て碎ける潮の花は照る月影を宿して美しく、只だ一人歸るも忘れて逍遙して居た。

月は薄雲に掩はれて四邊が霞に包まれたやう、潜り來た松原も一刷毛に撫でたかの如くに只だ黒く、吹き來る潮風も濡ッぽくなつた。大分夜も更けたやうである、徐々と歸らうと元來た濱邊を辿つて小半丁も歩みを返す時、うろ／＼

と彷徨ごとき黒き人影が眼に入つた、扱ては物好は我ればかりでない、世間には此の寂寞たる濱の景氣に憧憬して迷ひ來るものもあるよ、如何なる人であらう心憎き風流人ならん、土地のものではあるまい。近頃この邊に別荘が大分建ちました、また逗子や鎌倉の雜園を避けて來る避暑客も多くなつた、大磯茅ヶ崎の俗地を嫌ふて遠走つて來るものもあるやうだが、夫れ等は何れの地とて變りない海水浴に伊達競べ、眞の景色の心を動かすものでない、今頃の景色に足を運ぶものは、抑も何人であらうなど思ひつゝ、それとなく監視すれば風流客とは思はれぬ婦人、しかも同伴とてもなき只だ一人、何處となく落付ぬ舉動のあつて馳せ行くさまに察せられた。不思議、婦人一人のあの夜歩きこの寂寞たる濱邊に辿り來るとは怪しいと、心に感じたので窺かに後を尾行た。

婦人は後に人が尾行來やうとは夢にも知らぬ、海中に突き出した岩の上に突立つたま／＼ちつと海面を見下し今や一瞬飛び込まんとする際どい刹那、



「待て！ 待て！」

と岸山は高く叫んで後へ強く引戻した。女は不意に後より引かれたのだから、踏々跟々倒れやうとしたが、振り撈つて再び岩の上へ駆け上らうとする、

「お待ちなさい……お待ちなさい……」

「何うぞ、お放下さいまし、お救ひ下さるは却つて罪でございます。」

と女はますます藻掻て投身せんとする、岸山は抑へた手を弛めず、ズル／＼砂の上を引擦り来た。月はまた雲を拂つて照した。

「やア、英さんだね。」

四九

素懐を達する面前、改悟——情の籠る説諭

「あ、先生！」

と叫んで又も駆け出さんとする、岸山は確と其の袖を捉へて離さず、

「英さん、お待ちなさい、懺悔をしたの改心したのと口でばかり言たつて何になります……身を殺して懺悔をした證明か立ちますか、改心したといふ實現になりますか……莫迦な……」

と叱咤するごとく鋭く云つた。此の言葉は恰も百雷の一時に頭上に落ちたやうに、強い怖しい感動を俊子の胸に與へ、知らず識らず身はふる／＼と顫へ、鼓動は胸に波打つやうに高まつて来た。

「はい……」

と云つて砂上に伏し轉んだ。チロリと一瞥して抑へた手を弛めて岸山の語氣は再びあらく／＼しく成つた。

「貴女は我が輩に面當をする積りですか、左様でせう。」

と嚴肅な聲が耳に入つた、俊子は頭を少し揚げ、兩手を砂に突いて涙に曇る聲も哀れに、



「先生には何とも申し上げやうもない重々の心得違ひをいたしました、決して面當のお恨みのといふ心は毛頭ございません……私は飛んでもない不心得からして、先生には御迷惑をかける、道徳の大罪を犯しました罰は靦面、社會からは排斥されて誰一人交際して呉れるものもなく、犬よ牝犬よと罵詈譏諂を受け、一時私を傀儡に使ひました、鷲塚男の如きは其後用があつて面會に參つても御用多忙だとか、不在だとか申して面會を謝絶され門前拂ひ……身の置き所もない始末となつて、全くの心の底から改心いたしました、あ、實に虚榮に走つた迷ひと覺り、私の周圍に纏ふ悪霧を拂ひ去りますと、只だ怖しいばかりで赤心を以て懺悔いたしました、是のことは神に誓ひを立て申し上げるので、私の赤誠でございます……實は煩悶の結果懺悔書をお手許へ差出し、一言のお許しを得度と思ひましたが……私の改心をお認め下さい……同情して戴くは、たゞ棚倉の奥様一人より無いのです、死を決して當地へ參

つたも只だ一度生前に御目に懸り、私の懺悔をお耳に入れ度未練でございますので、爺やにまで迷惑を掛けて、望みを遂げられませんかから今夕遺書をお手許へ送り時間を圖つて此の始末で……最う私は是れて生前の望みが足りました、最早生てるて甲斐のない俊子でございます、どうか此の世のお暇を戴きます……」

と言ひ了つて瓦破と伏し暇り泣きに泣いた。其の舉動に瞬きもせず見張てゐた岸山照雄は、

「莫迦……死んで何うするか、岸山照雄は輕卒に死を以て罪を償はんなどいふ改心や懺悔は、見たくも無い、聞きたくも無いぢや、改心をするには改心の仕方があらう、懺悔をするには懺悔の仕方があらう、敢て神に誓ふに及ばん、人に誓ふに及ばん、我れと我が心に誓へは足るのぢや、懺悔書も見つた、此ごろの窮迫も聞いて居るが、それは何れも自ら求めた孽で他を恨むべ



き處は更(さら)にない、懺悔(ざんげ)をすれば神(かみ)も許(ゆる)したまふとか云(い)つて、耶蘇(イエズス)の坊主(ぼくし)は癖(くせ)のやうに云(い)ふが、懺悔(ざんげ)をしたからつて神(かみ)が許(ゆる)すものでない、それに對(たい)する赤心(まごころ)が現(あら)れ誰(た)れの目(め)にも見(み)えてこそ始(はじめ)ての懺悔(ざんげ)である、口頭(くちう)と表情(へうじやう)のみで實現(じつげん)が無(な)くつて何(なん)にならうと思(おも)ふか、他人(ひと)は知(し)らず岸山(きしやま)照雄(ていゆう)は確認(かくにん)が出來(でき)ない、眞(まこと)に懺悔(ざんげ)し改心(かいしん)したのならば實効(じつかう)をお舉(あ)げなさい、夫(そ)れは一朝(いちやう)一夕(いつせき)で舉(あ)がるものでない、果(はた)して其(そ)の赤心(まごころ)で實効(じつかう)を舉(あ)げたらば死(し)は愚(ぐ)だ、懺悔(ざんげ)も改(か)心(しん)も泡沫(ほうまつ)に葬(ほうじ)つて了(しま)ふのである、確(たしか)に赤心(まごころ)があるか……」

と念(ねん)を推(お)された、言(げん)々句(く)々首(あひくち)で腸(はらわた)を刺(さ)らるゝやうな氣(き)がして、腋(わき)の下(した)から冷(ひや)汗(あせ)をだくりく流(なが)して居(ゐ)た俊子(としこ)は、

「はい、確(たしか)に赤心(まごころ)でございます。」  
と判然(きつぱり)答(こた)へた。

「やらう。」

「はい、有難(ありがた)うございますが、只今(ただいま)の私(わたし)では何(なに)をするにも社(しゃ)會(かい)に容(ゆる)められな

いので、是(こゝ)れには當惑(たうわく)いた まする……」

と俯垂(うなだ)れた頭(あたま)が上(あ)がらぬ、

「社(しゃ)會(かい)に容(ゆる)められるやうに成(な)らば、屹度(きつと)遣(や)り遂(と)げるな……」

「はい……假令(たと)何(なん)様(さま)ことでも、御命(ごめい)令次(れいじ)第(だい)に粉骨(ふんこつ)碎(さい)身(しん)いたします。」

「可(よ)い……今夜(こんや)は爺(ぢい)やの家(うち)に泊(とま)つて明日(あす)東京(とうきやう)へ歸(かへ)れ、添書(てんしよ)をやる……」

「はい……」  
と云(い)つた切(き)り只(ただ)嬉(うれ)しさが先(ま)だつて、女丈夫(ぢよぢやうぶ)とも云(い)はれた俊子(としこ)は言葉(ことば)が出(で)なかつた。

「最(も)う大分(だいぶ)遅(おそ)い……往(ゆ)かう、我(わ)が輩(はい)が案内(あんない)してやる、さア來(こ)い。」  
「それでは餘(あま)りに……」



「構はん……」

## 五〇

放免女囚取所——少壯者の  
氣焰——民政黨と實業團提携説

秋風颯々と吹いて桐葉自ら落ち、だらけた身軀も引締つて人々の活動も盛んになった。一時は狂瀾をまき怒濤をあげた政海も、瓦礫は鎔け金鐵は爛れん暑さに倦み疲れし、午睡の怠氣は覺醒して漸く政治期に入つた。衆星は中央に集つて賑かに活躍せんとして居る、秋月内閣の評判はますます輿論に逆らつて、將に梧桐の凋落に髣髴たる傾向があつた。

春以來人の噂に登つてゐた、社會的慈善事業である放免女囚取所の組織は成つた。民政黨の名士や實業團の有志に依て設けられ、夫人や令嬢が熱心に盡力してゐる、會長に推舉されたは民政黨の總裁として、現内閣の後をうけて輿望を満さるべく期待さるゝ大河原忠敏の夫人閑與子である、副會長は實業團の

園田庸一郎の夫人静江子である、幹事には紳士の夫人が擧げられてゐた。此の放免女囚取所は、下澁谷に建築が落成して夕日に照り増す紅葉の赤く輝く十一月二十日に開所式を擧げた。

澄みきつた秋の空は清らかに、種々の小禽の紅葉する樹の間に飛びかひて、心地よい小高い丘には彩旗が縦横に翻へり、紅白の段々幕が引き廻された中には、大天幕が二張三張高く聳え、嚙腕たる音楽が清い空氣の間を走つて居る、自動車や馬車や俥が追々と集つて門前に市を爲す、薇薔の徽章を胸間に挿した當日の接待人は、忙しく駆けまはつて居た中に、入口の受附には甲斐々々しく英俊子が活動してゐる、棚倉豊策の新細君となつた俠婦人お僊もゐた。朝野の紳士は續々來會して新築の女囚を收容する室内に設けた休憩所に入る、新代議士の棚倉豊策などは氣鋭當るべからざる氣焰だ、少壯政治家は意氣鋭く政論に花を咲かせて中々賑ふ。



「おい、棚倉、今度の議會では是非反對黨を驅逐せんけりやアいかんぞ、全體臨時議會で不信任案を出し、政權を此方へ掌握すべきが順序ぢやないか、先輩の腰の弱いには齒痒ひ……君なんか大に硬論を唱へて、萬歳を三唱せんけりやアならんぞ。」

「同感だ、僕なんか、随分本部へ肉薄したがね、先輩が許さんので不平だつたが目を眠つて黨議を重んじたのだ……併し此度は先輩の意志も大分強硬であるぞ、岸山君などは最早猶豫すべきでない、今期不信任案の提出を逡巡するに於いては、輿論に反對するに均しい、否な輿論の反對者である、黨勢を維持せんとすれば實行せざるべからずと極論しとる、又稻積君だつて之れに反對する氣遣ひは無いさ……血の循つてる人間なら議會開會前に城を明渡すのだが、政權に戀々しとる彼れ等ではこの舉に出づるか何うか豫測し難いよ……けれども、最う三十五六日の命脈だらう。」

「愉快……愉快……愉快……」

と騒いでゐる處へ岸山と稻積の二人は何か話ながら廊下を歩いてゐた室内の少壯政治家は之れを見るより取り巻いてまた政見を叩くなど、ワア〜と云ふ騒ぎで拍手の響きは新築の家屋も動揺するやうであつた。

式は初まつた。會長大河原夫人は放免女囚取所の開設に就て挨拶を兼ねて一場の演説をした、流石は總裁の夫人、巧妙な演説とは言ないが壯重であつた政友の代表者としては稻積武夫が演壇に立ち、簡單に祝辭を述べて退くと、實業團を代表して伊澤啓一が老軀を壇上に運び揚げ、最も着實に企望を述べ祝詞に代へ、幹事の女流が答辭を述べて式は終り食堂は開かれた。

食堂は二個の大天幕内である。接待員は奔走盡力これ努めてゐる、女は赤薇薔の花の徽章である、男の手傳ひ側はみな白薇薔の花をつけてゐた。多くの來會者中には英俊子が頻りに斡旋盡力するを見て、



『英俊子は國憲黨の犬となつて、我々を苦しめた敵の片割だのに何うして來てるのだらう。』

と一人が言へば、

『然り増毛繁治君も一時は彼の毒牙にかゝつて、非常に迷惑された一人だ、彼俊子は眞面目に鷲塚男爵や、秋月公爵の甘言に乗らないで、我黨のため且つは岸山先生のために活動したのであつたならば、今日は岸山先生夫人として或は列席するの幸榮を有したかも知れん、實に女の慎しむべきは一時の虚榮心だ。』

と合槌を打つて俊子の舉動に注目した。

時に俊子は多年其行動を共にした政友に、今の場合面を合せるのは中々に辛いのであるが、一旦改悛した上は人が何と言はふとも、又何と評しやうとも、我慢せねばならぬ、殊に身から出た錆で、仕方がないと斷念らめ、じつと身を

慎しんで、始終首を垂れてゐた。

これを見た増毛繁治は、つと身を俊子の傍にすりよせて、

『いや俊子さん貴女はよく改心なされた、今日此席で貴女の顔を見るのは實に何より嬉しいです、貴女より返済して貰つたあの三百圓の證書は、慥かに受取ました、今更めて感謝の意を表します、私も増毛繁治です、一旦の恩を其儘にする様なことは致しません、屹度貴女を幸福な方に導きませう。』

といと熱心に誠意を面に現はして言つた。

俊子は無言のまゝ不動の姿勢で、手を前に垂れて組み、かゝる言葉を今眼前に増毛繁治の口から聞くにつけ、過ぎ來し方の不心得を思へば、氣の毒にもあり又身を切らるゝ切なさには、はや涙さへ浮び出で、

『増毛さん何ともあなたには申譯がありませんでした、今更懺悔も遅いけれど、全く一時の迷ひであつたのですから、どうぞ許して下さい、これからの



英俊子は全く心を入れ替へて、一身を民政黨に捧げ、一意専心本會のために盡す考へです、岸山先生の教訓は膽に銘じて死ぬ迄忘れません。』  
と言々句々肺腑より出で、決心の色は其面上に表れた、折から來かゝりし岸山照雄は、俊子の動かすべからざる悔悟の語を立聞して、そゝろに懷舊の情に堪へず、心に肯きてつと行過ぎんとした。

これを見つけた増毛繁治は、照雄を誘ひ來て、

『岸山先生！英俊子は今も御聞きの通り真心より改悛しとるです、已に既に改悛したる以上は、私より特に御願ひですが、元々通りの交際をしてやつて下さい、尙多くの政友は今に彼を疑つて居るです、幸に此の會の席上で、貴君の口から紹介して載けば、誤解も解け又俊子さんもどれ程喜ぶか知れませんが、どうか彼の爲めに我願ひを容れて下さい。』  
岸山とて固より木石でない、心から許したこのある俊子である、其行は

憎むべきであるが、今面のあたり哀痛なる俊子の有様をみては、多少心が動かぬでもない、然し今は未だ其機會でない、といつて増毛の口添もあるのに、無下に断はるのも本意でないと思つて、

『増毛さん俊子さんの改悛は確かに見届けた、然し僕は全部今直ぐに君の要求を容るゝ譯にはゆかん、只政友に誤解さるゝだけは氣の毒であるから、何とか辯じてあげやう。』

と俊子を伴ないて演壇に現はれた、

『諸君今改めて諸君の前に紹介する人がある、それは英俊子で、彼は今や過去の俊子ではない、より以上我が黨我が會の爲めに大に盡力する熱誠家である、今日改めて本會の幹事に推選したいと思ふ、將來共に誤解のないやうに願ひたい。』

と簡單ではあるが、誠をこめて要點を辯じたので、今まで疑つた多くの會衆も



忽ち拍手喝采して之を迎へた、  
俊子は義あり情ある岸山先生の今の辯解と、増毛繁治の頼もしい心根に、心から感謝の意を表し、丁寧に會釋して愈々我決心の臍を固め、幹旋盡力に努めて居た。  
宴酣になつて乾盃式は實業團の泰斗伊澤啓一の發聲で行はれ、和氣藹々として閉會を告るに至つた。此の事があつてから世間では、民政黨と實業團の中立俱樂部とは提携が黙約されたものと見認め、來たるべき議會は如何に花々しかるべきかを想像しつゝ居る。

政治小説 狂瀾 終

大正二年三月廿七日印刷  
大正二年四月一日發行

(狂瀾奥附)  
正價金四拾錢

不許複製	
著者	覆面外史
發行者	福田滋次郎
印刷者	牛坂三郎
印刷所	邦文社
發行所	日本書院

東京市神田區北乗物町四  
振替口座東京壹貳〇八六番

東京市神田區北乗物町  
四番地

東京市芝區愛宕下町  
二丁目五番地

東京市芝區愛宕下町  
二丁目五番地



書 賣 發 院 書 本 日

<p>三遊亭 圓朝演 離魂病 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>三遊亭 圓朝演 圓朝人情哢 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>小 說 裏面不如 正價四十錢 郵稅六錢</p>	<p>小 說 世界大動亂 正價四十錢 郵稅六錢</p>	<p>小 說 現代五人女 正價四十錢 郵稅六錢</p>	<p>世界珍談集 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>新 落 語 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>痴遊義士傳<small>(討入の卷)</small> 正價六十錢 郵稅八錢</p>
<p>非常識論 正價六十五錢 郵稅八錢</p>	<p>沒常識論 正價六十五錢 郵稅八錢</p>	<p>日本俠客揃 正價四十錢 郵稅八錢</p>	<p>日本名人揃 正價四十錢 郵稅八錢</p>	<p>百 笑 心 正價二十錢 郵稅四錢</p>	<p>武士道 美談 英雄物語 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>偉人之母 正價三十五錢 郵稅六錢</p>	<p>滑稽問答 正價三十五錢 郵稅六錢</p>



272  
635



終

日本書院刊

